

本書は、私たちが日常的に使う「性格が悪い」という言葉を、心理学の視点から多角的に掘り下げる試みである。著者は、人格心理学の研究成果をもとに、近年注目される「ダークな性格」の理論をわかりやすく紹介している。単なる「悪い人の特徴」を記述するだけではなく、社会や人間関係に潜む複雑な心の働きを浮かび上がらせている点に、本書の最大の魅力がある。

冒頭では、性格を言葉で表現する試みの歴史が整理される。英語にはおよそ1万8000語の人間描写の語彙があるとされ、そのうち性格を説明するものは約4500語に及ぶという。私たちが「暗い」「危ない」といった単語で片付けがちな人間の複雑さを、心理学はより精緻に分類してきた。その中でも現代心理学が注目してきたのが、「マキャベリアニズム」「サイコパシー」「ナルシシズム」という三つの性格特性、いわゆる「ダーク・トライアド」である。さらに近年の研究をふまえ「サディズム」と「スパイト（意地悪さ）」を加えた「ダーク・テトラッド」「ダーク・ペンタッド」についても紹介している。

マキャベリアニズムは「目的は手段を正当化する」という考えに象徴される。他者を戦略的に操作する姿勢は、組織や社会の中で有能に映る場合もある。サイコパシーは、罪悪感の欠如や衝動性といった特性で知られるが、表面上は穏やかで魅力的に見えることも多い。ナルシシズムは自己愛や誇大空想に基づくが、必ずしも一面的な悪徳ではなく、承認欲求や成功へのモチベーションにつながる側面もある。サディズムやスパイトはさらに分かりやすく、他者に苦痛を与えること自体や、自らをも巻き込んででも相手を陥れる行為に喜びを見出す傾向を示している。興味深いのは、こうしたダークな性格が必ずしも失敗や社会的不適応に直結しない点である。

第2章では、経営者やリーダーにおける事例が取り上げられる。職場環境においても、サイコパシー傾向の人が冷静さや自信を買われて採用されやすいという現実がある。他方で、こうした人物がもたらす逸脱行動は、心理的安全性を損ない、組織全体を不安定にする危険を生み出すことも指摘している。経営者としてリーダーシップを発揮する場合でも、ダンラップは、自らの利益を最大化するために従業員を容赦なく切り捨てたことで悪名高いとして、ダークな性格の持ち主であると評する。一方でスティーブ・ジョブズやイーロン・マスクのように、同じく強烈なエゴやカリスマを持ちながらも「世界を変える」というビジョンに影響されたリーダーは、社会的成功を収めていると指摘している。

第3章では、恋愛や身近な関係におけるダークな性格の表れも描かれる。恋愛スタイルの分類やナンパ実験の事例は、読者を引き込む具体性を備えている。ダーク・トライアド傾向の強い人は「遊びの恋愛」や「目的志向の恋愛」に結びつきやすく、マッチングアプリの普及とも親和性が高い。さらに、サディズムとサイコパシーは「荒らし行為」や攻撃的な関係性の背景にも位置づけられる。

第4章では、人間の性格は、情緒性、外向性、協調性、勤勉性、開放性といったビッグ・ファイブ・パーソナリティで説明され、その中でもダークな性格は協調性の低さを特徴とし、他者への共感や配慮に欠けている傾向があるとされる。さらに、正直さ・素直さを加えた HEXACO モデルが紹介されている。

第5章では、ダークな性格が遺伝によって固定的に決まるものではないことが論じられている。一つの遺伝子が一つの性格を決定するわけではない。複数の遺伝子があり、その影響の捉え方は私たちの視点に依存する点は、ダークな性格にも当てはまる。

また、人生における大きな出来事や生活環境の変化は、長期的に性格へ影響を与える可能性がある。ダークな性格特性は成人期を通じて平均的に低下する傾向があり、人は社会生活に適応する中で、より望ましい性格特性を身につけていくとされている。

第6章では、良い性格・悪い性格を単純に分けることの難しさが述べられている。ある心理特性だけを変えようとしても、他の特性に影響が出る可能性があり、社会的に望ましくないからと無理に抑えると、心理面での副作用が生じる可能性がある。

一方で、厳しい環境ではダークな性格が有利に働くこともある。現代社会では不利になりやすいが、問題に行き詰まったときには、他人をあまり気にせず、ダークな性格の一部を取り入れて行動することで、打開策が見つかる可能性があると示されている。

本書の印象的な部分は、「性格が悪い」という一言で切り捨てられてきた人間像を、多

様な心理学的研究に基づき再構成していることである。特定の性格特性を「悪」として排除するのではなく、「どう機能するか」「どのような影響をもつか」といった冷静な視点が必要である。